

狂言台本における副助詞ガナ

小林正行

1. はじめに

本論文は、継承された中世語と新たに採り入れた近世語との性質を併せ持つ、狂言台本の言語を対象として、副助詞ガナの使用実態を明らかにすることを目的とする。

副助詞ガナは、吉川泰雄(1959)では係助詞カに終助詞ナが接続し熟合してできたカナが濁音化したものかとしており、堀内武雄(1967)では終助詞モガナから派生した願望を表す終助詞ガナが副助詞化したものとしている。現在の辞書類では、係助詞カ＋終助詞ナを語源とする考え方が一般的で、中古の末からその用例が見られ、中世に入り盛んに用いられるようになるという。不定語や不定語に格助詞を伴ったものを上接し、希望・意志の表現を伴う場合と、不定語と関わりなく、一般的に体言・助詞に付く場合や、推量を含む複合辞に割って入る事もあるとされ、その表す意味は、願望の意を含むものと、対象を漠然と指し示すものとの大別されるというが、実際にいつごろどのような用法で用いられたのかということについて、いまだ明らかでない点も多い。森脇茂秀(2000・2001)では、希望表現形式の変遷を追う立場から、中世前期から近世までの願望の助詞モガナ・ガナの用例数を承接語別に調査し、中世後期では不定語を上接するガナの用例が多くなり、希望表現としてのガナが衰退することを指摘している。朝留和洋(2004)は、狂言台本中での濁音ガナと清音カナの用法の違いに着目し、不定語を上接するガナと、推量を含む複合辞に割って入るカナとの用法の違いを明らかにしている。確かに、ガナとカナの用法の相違は大きな問題であるが、当時の文献では濁音表記が省略される場合があることや、翻字本文では校注の態度により清濁が変更される恐れ^{注1)}があること、さらに現行の曲でも「…でかなござらう」のカナを、大蔵流山本家では清音、大蔵流茂山家では濁音で発音していることなど、清濁を区別して用法の違いを扱うことはきわめて難しい。また、諸辞書類では「…でがなござらう」の例が狂言以外の近世の文献からも挙げられている。

そこで本論文では、ガナとカナを一括してガナとして捉え、上接語と共起する文末表現について近世前期から中期以降に筆写された各狂言台本での使用実態を明らかにし、用法の変遷について考察する。

調査に使用した狂言台本は稿末に示す。挙例に際しては、濁点はテキストに従い、漢字は通行の書体に改め、私に下線を施した。

2. ガナの使用状況

2.1 全体の傾向

本節では、各台本におけるガナの使用数、その上接語と共に起る文末表現の相関関係について表に示し、全体の傾向を確認する。まず、表1で各台本での使用数を示す。

表1 ガナの使用数 注2)

	天理	虎明	正編	古本	続	外	拾遺	保教	名女川	虎寛	賢通	三百
用例数	8	29	7	3	2	3	3	14	14	34	18	36
流派	和泉	大蔵	他	和泉	他	他	他	鷺・伝	鷺・伝	大蔵	鷺・仁	和泉
成立年	1640 頃	1642 注3)	1660	1653 ～93	1700	1700	1730	1724	1761	1792	1855	1824 ～85

各流派・各時代の台本で全般に幅広く使用されているが、特に『保教本』以降、つまり近世中期以降の台本で使用数が増加する傾向にある。ここから、古体を継承する用例だけではなく、近世中期以降新たに加えられた用例が存在することが予想される。

では次に、上接語と共に起る文末表現の相関を見る。次ページの表2は、ガナの上接語別に大別し、次にそれぞれ共に起る文末表現ごとに分類したものである。表中の用語について示す。上接語の欄に「直接」とあるものは、上接語が助詞などを介さずガナに直接上接する形、「+と」「+で」などとあるものは上接語の次に助詞ト、助動詞デなどを介してガナに上接する形をあらわす。文末表現については文脈から読み取り、「意志」「願望」「疑問」「平叙」「推量」に分類した。「終止」としたものはガナで文が終るものの願望の終助詞ガナとは異なり希求の意を表さないものである。

表2から様々なことが指摘できる。まず、全体からの特徴として、上接語は不定語と名詞にほぼ限られること、不定語を上接する例では文末表現は「意志」と「終止」に集中し、名詞その他を上接する例では「推量」に集中することが挙げられる。注4)

それぞれの台本ごと、時代ごとの特徴としては、『天理本』『虎明本』『狂言記正編』では不定語を上接する例にほぼ限られること、動詞を上接する例は『狂言記正編』に限られること、『和泉家古本』以降で不定語を上接する例は減少し、名詞を上接する例が増加して、特に「+で・推量」型に用例が集中すること、『保教本』で様々な形式で用いられること、『名女川本』『虎寛本』『賢通本』では用例数は多いものの用法は限られること、後代に下る『三百番集本』で名詞を上接する形で様々な表現と共に起ることなどが挙げられる。近世前期では「不定語・意志」「不定語・終止」、近世中期以降では「名詞+で・推量」と、中心となる用

法に大きな差があることが確認できる。

では、次節から、各上接語と共起する文末形式との組み合わせごとに用例を確認し、ガナの使用の変遷について考察する。

表2 ガナの上接語と共起する文末表現

上接語		文末	天	明	正	古	続	外	拾	保	名	寛	賢	三	計
不定語	直接	意志	4	9											13
		願望		1	1					1					3
		終止	2	1	1	1				1		1	2	3	12
		疑問								1					1
		平叙								1					1
	+と	意志		17	2			1				4			24
		願望			1										1
		終止		1											1
	+に	意志								1			1		2
	+を	推量									1				1
		疑問												1	1
	+で	疑問									3				3
名詞	直接	意志	1											1	2
		願望	1									5		2	8
		終止												1	1
		推量				1	1		1	4				4	11
		疑問				1									1
	+で	推量					1	1	1	4	9	24	14	13	67
	+に	推量						1	1				1	1	4
	+を	推量												8	8
引用句	+と	推量									1			2	3
動詞連用形	+て	推量			1										1
	+てで	推量			1										1
計			8	29	7	3	2	3	3	14	13	34	18	36	170

2.2 不定語を上接するもの

2.2.1 直接上接

○意志

1. 更ば何がなやらうと云て、あそこ、爰を見る（天理本・箕被）
2. なにがなおませうやれ（虎明本・入間川）

天理本・虎明本で多用される形式で、相手に何か与えようと思案する場面で典型的に用いられる。上接する「何」の不定の意によって、「何」の示す範囲を漠然と不定のままにおき、実現の仕方を思案する用法といえる。ガナそのものは上接語を一つの具体例として取り上げ、他の同類項の存在を想定させて上接語の示す範囲を拡大させる「例示」の意を持つと考えられる。

○願望

3. 何がなこのへんたうしたひが、おもひいだいた事が有（虎明本・きかず座頭）
4. ヤイ——有難ハ傘ノ柄ニ付テハ面白イ何ガナヤリタイ（保教本・秀句傘）

「たい」という願望を表す表現と共に起るが、用いられる場面や文意は上述の意志の例と同様である。願望の終助詞ガナと大きく異なる点は、終助詞ガナが上接名詞が表すモノを「ほしい」と希求するのに対し、副助詞ガナは「何」の範囲を漠然と不定のままにおき、「何がな」で示したモノを「やりたい」と願望する点である。

○終止

5. 何がなと云て、刀を取らする（天理本・人を馬）
6. 何がなとぞんずれ共、幸もちあわせた程に、此びんかづみをしんずる（虎明本・すみぬり）
7. 選々 渡御タニ依ツテ何ガナト思フ折節ニキタ所テ幸ト云事シヤニコノマシマセ（保教本・鱧包丁）

ここでは「何がな」で文が終止すると考えておくが、「何がなやらう」のような意志表現や「何がなやりたひ」のような願望表現を省略して記したとも考えられる。いずれにせよ、上述の意志や願望と同様、「何」の示す範囲を不定のままにおいて、実現の仕方を思案する用法である。5は「何がな」で文終止しト書になり、6・7は自分の考えを引用する形である。

新しい台本では、各流派共通して「連歌盗人」という曲に用いられるが、古い台本ではこの曲には用いられない。これも実現の仕方を思案する用法である。

8. 扱何がなと思へども、折ふし何もない。（虎寛本・連歌盗人）
9. さてそなたに何がなと思へども、折節何も持ち合はせぬ。（賢通本・連歌盗人）
10. 何がなとは思へども。最早下々も寝鎮まっている。（三百番集・連歌盗人）

○ 疑問・平叙

保教本に1例ずつ用例が見られる。

11. 何ガナ御肴ニヨウ御ザラウゾ(保教本・天狗ノ婚)

12. 先ハシテヨリ云何カナ思出シ云マギラカステイニテ吉(保教本・八句連歌)

11は、相手方の立頭と婚礼の酒宴の余興を相談する台詞である。「何」の内容を自問すれば意志表現の「何かなやろう」などと同じ用法となるが、相手と相談している点が異なる。

12は台詞ではなくト書の用例で、「何かしら」の意で用いられている。「何」の範囲を不定のままにおく点は共通している。

2. 2. 2 不定語+と

○意志

13. 御きげんのわるひは尤じや、何とがないたひて御機嫌をなをさう(虎明本・すゑひろがり)

14. 何とがないたさうずるとしあんを仕るに、かのものゝおちぼうずが、此山一つあなたに、寺をもつていらるゝが、…(虎明本・つきつね)

15. をのれ何とがなせうぞはらたちや(外五十番・兄弟いさかい)

16. 何とがな致うやれと存る所に、山一つあなたに大有徳な御方が御座つて、何者には寄るまい片羽物に御扶持を被成うと高札を打れたと申に依て…(虎寛本・三人片輪)

17. 何とがな致うやれと存る所に、かれが伯父坊主に伯藏主と申て御座るが…(虎寛本・釣狐)

いったいどうしようかと自分の次の行動を思案する場面で典型的に用いられる。虎明本に多用される形式で、直接不定語を上接する場合は事物、トを用いる場合は行動を思案する、というように使い分けがなされている。「何」の示す範囲を漠然と不定のままにおいて、実現の仕方を思案する点では共通している。

虎寛本で不定語を上接する例は、集狂言に限り現れる。虎明本と共通する例は14と17だけだが、形式としては虎明本の形を継承したものと考えられる。

○願望

18. 何とがなして。あのぼんを。うかしたいと存じます。(正編・宗論)

狂言記正編に1例のみ見られる。意志表現と同じく、行動を思案する用法である。

○終止

19. せうやうがなさに、さやうにしたが、誠にみぐるしひ、何とがな、おもひ出た、ひつしきを付させてやらふ(虎明本・ひつしき賀)

虎明本に 1 例のみ現れる。「何とがな」で文が終止すると考えておくが、本来表記すべき意志や願望の表現を省略したものとも考えられる。これも行動を思案する用法といえる。

2. 2. 3 その他の場合

○ 不定語＋に

鷺流の台本のみに見られる。

20. 扱烏帽子髪ハ殊ノ外六ヶ敷イ物シヤト聞タカ誰ニカナ結テモラフウ（保教本・麻生）

21. やあら何にがなならうやれ（賢通本・靱猿）

2例とも上述の例と同じく実現の仕方を思案する用法である。

○ 不定語＋を

22. 菊市、何をがな聞付て云た物でかな有う（名女川本・つんぼ座当）

23. 何をがなやらうぞ。（三百番集・箕被）

22は一文中に二度ガナを用いた稀な例である。23は離縁のしるしにものを渡す場面で、何を渡すか思案し妻に相談をしている。

○ 不定語＋で

名女川本に 3 例のみ現れる。

24. はあ、なんてかなござりました（名女川本・八尾）

25. なんてかな御座るぞ（名女川本・犬山伏）

26. して、なんてかな御座る（名女川本・伊愚意）

「でござる」に割ってはいいる形で現れる。いずれの例も相手のいいよどみや勿体つけた台詞を問い返す場面で用いられる。

2. 3 名詞を上接するもの

2. 3. 1 直接上接

○ 意志

名詞を上接する 2 例は、共通の謡の例であり、古体を残すものと考えられる。

27. 忍ふその夜の、太刀は鏝白し、太長刀はきようへし鑓は柄長しや弓鞆は犬が吠え候竹杖はおいまひましや棒さへ棒かなついて行かふもかりはね越えて（天理本・節分）

28. 竹杖はおいまひましや。棒さい棒がな突いて行かう。（三百番集本・節分）

持っていくものをあれこれと挙げた上で「さへ棒」を持っていこうとする謡で、ガナは武器類の中から「さへ棒」が最も相応しいと「強調」して示していると考えられる。他に考えられる

同類項を否定して「さへ棒かな」と示しているため、「例示」とは考えにくい。

○ 願望

天理本、虎寛本、三百番集本に見られる。合計 8 例だが、3 種類の用例に限られる。

29. 又鮎の鮎がな、食いたいと云て、留むるも、あるなり(天理本・地藏舞)

天理本の例は卜書中のもので、留めの別演出を示す例である。その後の台本では継承されず、孤例である。願望の終助詞ガナで文終止し、「食いたい」と改めて願望を述べるとは考えにくく、副助詞の例と捉える。「鮎の鮎こそが食いたい」とまさに食べたいものそのものを採り上げる「強調」の働きをしているとも、「鮎の鮎でも食いたい」と食べたいものの一例として挙げる「例示」の働きをしているとも考えられる。

30. 私もつれがなほしいと存て御ざる。(虎寛本・三人夫)

虎寛本の 5 例は30のように「つれがなほしい」という固定した形式に限られる。下に「欲しい」という願望の表現を伴っている。虎明本の類曲「餅酒」の同じ場面を見ると、「只今ひとり事にも、よひつれもがなと申て御ざるが、幸の事おとも申さう」と、願望の終助詞モガナ＋引用のトという形になっており、独り言を直接引用する形である。この用例は、虎明本同一場面のモガナを形の上で継承した、狂言台本特有の用例と考えることができる。虎寛本でのガナの典型的な用法は「名詞＋で・推量」型であり、この例は形の上ではモガナに近いガナを継承しつつも、ガナは既に単独で「願望」を表す意味を失っており、「ほしい」と直接願望を表す語を補う必要があったものと考えられる。ガナ自体の働きとしては、「つれでも」と上接語を漠然とした一例として取り上げる「例示」、もしくは「つれこそが」と上接語を際立たせる「強調」と考えられる。

31. 水がな欲しや。(三百番集・蛻)

三百番集は 2 例同じ形で、酔い覚めの場面に用いられる。他に見られないが、「何か飲み物、水でもほしい」のような「例示」とも、「水こそがほしい」と「強調」にも解釈できる。虎寛本の酔い覚めの場面には「湯を呉い、茶を呉い」と湯と茶とを示している。

○ 終止

32. くら――と煮ゆるところを御慈悲深き釈尊に。すくひ上げられたま――苦患の隙が
なと。思へば包丁小刀おつ取りのべて。…(三百番集・野老「語」)

天理本・和泉家古本の同曲では「くけんの隙かなと、思へば」と詠嘆の終助詞カナを用いている。願望の終助詞ガナと考えるには希求の意が認めにくい。濁点の誤りと考えるべきであろうか。

○ 疑問

33. それかし此所へ聳入かくらまのつつとの奥まてかくれかなふて定而生魚かあまたあ

らうす虫をおこさせてはなるまひと思ふて山椒の皮かな商売にきたか(古本・恵比須毘沙門)

和泉家古本に1例のみ現れる。文末形式は疑問であるが、相手に回答を求めるものではなく、婿養子の候補争いの相手となる聞手が来た意図を自分勝手に推量し、自分の婿入りを祝うために縁のものを持ってきたと決めつける発話中のものである。相手が婿養子にきたのではなく「山椒の皮」を持ってきたと「強調」しているとも、別の用事の一例として取り上げる「例示」とも考えられる。同じ和泉流でも天理本・三百番集本の同箇所は「山椒のかわをうりにきたか」とヲを用いるが、虎明本では「虫ばしおこさせてはと思ふて、山椒のかわをうりにきてあるか」と「虫」にバシを用い、保教本では「山椒ノ皮ハシ売ニ来タカヤアイ」と「山椒の皮」にバシ、時代の下る虎寛本では「生魚をどう喰せ、蟲ばし發せてはとおもひ、山椒の皮ばし賣に來て有るか」と「虫」「山椒の皮」の両方にバシを用いている。ガナとバシとの狂言での使用の上での関連性を考える上で貴重な用例である。

○ 推量

近世中期に当たる狂言記類と和泉家古本、保教本、さらに時代の大きく下る三百番集本に見られる。

34. 定て酒哉のふで口きいてをるものであらふ。(続狂言記・素襖落)

35. おのれはまた酒かなくらふて口をきいておつた物てある。(拾遺・止動方覚)

狂言記類2例は同様の用例で、主が帰りの遅い太郎冠者をとがめる場面で用いられる。「酒」を上接しているが、茶や水など酒の同類項を想定しているのではなく、遅れた理由として「酒を飲んでしゃべっていた」ことを一例として挙げて推量していると考えられる。

36. それかし此所へ聳入するか西の宮迄かくれかなふて定而生魚かあまたいらうと思ふて肴かな売にきた物てあらふ(古本・恵比須毘沙門)

和泉家古本独自の用例である。同じ和泉流でも天理本・三百番集本の同箇所は「なまうををうりにきたか」とヲを用いるが、虎明本では「うをばしうりに來てあるか」、保教本では「生魚バシ売ニ来テ有ルカヤアイ」とバシを用いている。33の疑問の例同様、ガナとバシとの関連を見る上で貴重な例である。

37. 何ト云ハシマシタ又何ノ無差シタ事カナヲシヤツタモ知レヌ(保教本・骨皮)

38. 定テ例ノ手クサビカナシテ居サシマシタ物デアラウ(保教本・八幡前)

39. 他リ近イ放生川へ同道シテ定テ水鳥カナ所望セウソ(保教本・八幡前)

40. 此間ハ皆子共ガ藪ノ中へハイル程ニ其時疵カナツケタ物デフリヤラウ(保教本・酒講式)

保教本の用例はすべて独自のもので、他の本には類例も見られない。41は、傷がつい

ている事の理由を問われての返答で、「疵」の同類項を暗示して示すのではなく、理由として「藪の中に入った」ことを推量して、一例として示す文中に用いられる。

41. 今宵逢ひに行くが嬉しさに。中に銭がな包み込で置かれたものであらう。(三百番集・文荷)
42. 定めて表に。袴がな着てゐらるで御座りませう。(三百番集・鞍馬聲)
43. 亭主が念者ぢやに依つて。有明がなとぼして置かれたものであらう。(三百番集・連歌盗人)
44. 扱はお前をなしかしう思うて。平六の幽霊がな出たもので御座らう。(三百番集・塗師平六)

三百番集本の例も独自のものが多い。45は虎寛本では「もし平六どのゝ幽霊ばし出ました物で御ざらうと存まする」(塗師)とバシを用いている。

2. 3. 2 名詞＋で

全用例「～で＋がな＋あらう／ござらう／おりやらう」と、推量の文末辞に割って入る形で、近世前期の古い台本には現れない。続狂言記以降用例が現れ、名女川本以降この用法に用例数が集中する。計67例と多用され、近世中期以降の台本でのガナの典型的な用法といえる。古い用例から細かく見ていく。

45. 是を著れば。定而はらるゝ時いたふない物でかなござらふ。(続狂言記・居杭)
 46. すまふの書の事てかなあらふ(拾遺・文相撲)
 47. くちなわがしうくはさぞなまながいしうくでかな御ざらふ(外五十番・竹生嶋詣)
- 正編を除く狂言記類で用いられる。知らないものを推量し、憶測で発言する文末に用いられる。
48. 某モコナタ杯ト連達マセウトハ夢ニモ存セナンダガ是モ仏ノ引合テカナ御サラウ(保教本・宗論)
 49. 扱加様にふと言葉をかけ、同道いたすも他生の縁でかな御ざらうぞ。(虎寛本・三人夫)
 50. 某もふとお目にかかつて同道致すも、ひとへに他生の縁でがなおりやらう。(賢通本・餅酒)
 51. 袖のふり合せも他生の縁と申す。さぞ深い縁でがな御座らう。(三百番集・今参)

道行きの途中で連れとなった者との会話で用いられる固定的な表現である。同様の例が名女川本で2例、虎寛本で16例、賢通本で6例、三百番集本で5例と、新しい台本で多くの用例が現れる。定型の台詞として固定しているといえるが、出会ったことが「仏の引き合

わせ」「他生の縁」という人為以外の強い力によるものと「強調」しているとも、「仏の引き合わせ」や「他生の縁」といった確証のないものを一例として挙げて推量した内容に幅を持たせる「例示」の働きをしているとも、さらに自分の判断を断言せず、口調をやわらげる働きをしているとも考えられ、解釈は難しい。

52. 是はこなたと四十末代仰あわされうと有お事でかな御座りませう、(名女川本・栗焼)

53. うたこふ所もない、ふくろうのついた物でかなあらう、(名女川本・鴉)

54. 只今はへ参る路しすがら、京わらんべの申ますは、どん太郎は兩人の女共に見捨られ、かくやに入り、修行に出らるゝと申て御ざるが、扱は左様の事でかな御ざらう。
(虎寛本・鈍太郎)

52は、贈り物の栗が三十や五十ではなく数の区切り悪く四十個だった理由についての推量、53は梟の鳴き声をあげて様子のおかしい人間を見、梟の巣を壊したと聞いて、梟が憑いたものと推量するものである。54は行方不明になった夫を捜す際に、町の噂話をもとに行方を推量するものである。これらの例では推量する根拠が示されており、確証性は高い。ガナは上接語を一例として示す「例示」の働きではなく、自分の判断を断言せず、口調をやわらげる働きをしていると考えられる。

55. 夫は定てふねでかな有う。(虎寛本・舟船)

56. 夫は定て櫻でかな御ざらう。(虎寛本・花争)

古歌を証拠として言葉争いをする曲で、なんの根拠もなく相手の示す古歌が間違っていると言い張る場面で用いられる。自論が正しいと無理に「強調」しているとも、相手が間違えているのではないかと勝手に推量して相手の示した古歌の本来の内容をあいまいに示す用法とも考えられる。

57. これは定めて殿様のお利口でかなござらう。(賢通本・靱猿)

58. 定めてお奏者の心得でかなおりやらう。(賢通本・筑紫奥)

57は生きた猿の皮を貸せという大名の頼みを、冗談であろうと推量するもの、58は笑えという命令を、綸言ではなく奏者の計らいであると推量するもので、根拠となるものは明示されないが、一般常識から考えて推量したものである。両例とも上接名詞を「例示」するのではなく、推量した内容をぼかし、口調をやわらげて示す用法と考えられる。

59. はあ牛に附けてやれと云はれたが。その牛が。まだ山から戻らぬものでかな御座らう。(三百番集・千鳥)

たまったつけを払うために、米を牛に運ばせっているとでまかせを言い、米が届かない理由を適当にでっち上げてその場をごまかす場面で用いられる。事実としての根拠は何もなく、文そのものの内容をあいまいに示す用法といえる。

2.3.3 その他の助詞

すべて推量表現と共起する。用例を示すにとどめる。

○ 名詞＋に

60. こなたのこれゑ御出なされたを草のかけより見て、あいたいとおもふてまほろしにかな見へられた物てこさらふ。(拾遺・塗師平六)
61. 道にかなねまらせう見にまいらふ。(外五十番・悪太郎)
62. むむ、さてはわごりよは酒にかな酔うたものであらう。(賢通本・月見座頭)
63. 聞けばこの中子供が藪の中で相撲を取るとやら聞いたが。定めてあの子も。大きい者にかな取つて投げられて。疵を求めたものであらう。(三百番集・酒講式)

○ 名詞＋を

64. 判官殿の思ひ人とぬかしをつたによつて。定めて静御前のことをかなぬかしおるかと思へば弁慶。(三百番集・今参)
65. 若し身共が事をかな云うて笑はせらるゝかと思うて。殊の外氣遣いをした。(三百番集・秀句傘)
66. それは定めて。畳の塵をかなむしつて居らるゝことであらう。(三百番集・文荷)

2.4 その他の例

○ 引用句＋と

67. あのみうち様は常のかみさまとはちがひまして、ちとわゝしう御座るに依て、是を持てまいつたらば、つかみさこうとかな仰られませう(名女川本・掬括)
68. 定めてむさとした物を見て。鬼ぢやとかな存じたもので御座らう。(三百番集・清水)
69. 私があれへ参つて。まだろくに腰を掛けるや掛けぬに。どうでも使はぬが損ぢやとかな思はれましたか。山一つあなたへ使に行け。(三百番集・縄綱)

発話・思考動詞を下接し、相手や第三者の発話・思考の内容を推量して述べる文中に用いられる。

○ 動詞連用形＋て、＋てで

70. 又おそう御さるほどにていど又。ようてかな御ざろ。(正編・武悪)
71. あゝ。こゝは六道で御ざります所で。まやうてかな。おるもので御ざろ。(正編・法師物狂ひ)

狂言記正編のみに見られ、類例は管見に入らなかった。70は推量の文末辞「でござろ」に挟み込まれる形、71は文末に推量の「でござろ」が用いられる。話題の人物の行動を推量して述べる文中に用いられる。

3. 考察

以上、不定語を上接する場合、名詞を上接する場合、その他の場合の各形式についてみてきた。それぞれについてまとめ、用法の変遷について考える。

不定語を上接するものは、近世前期書写の古い台本で多用される。中心となる用法は、上接の不定語の範囲を漠然と示し、実現の仕方を思案するものである。ガナそのものは他の同類項の存在を想定させて上接語の示す範囲を拡大させる「例示」の意を持つと考えられる。近世中期の驚流の台本で、若干の新しい用法が見られたが、その後の台本には継承されず、広がりは見られない。

一方、名詞を上接するものは、続狂言記以降で推量と共起するものが極めて多い。とくに、推量の文末辞に割って入る用法が計 67 例と、ガナの全用例の四割近くを占める。名詞を直接上接して意志や願望、終止の用法でも若干用いられるが、古体を残しやすい謡の例や、願望の終助詞モガナを形の上で継承したと考えられる例など、中心的な用法とは言い難い。推量と共起するものは、上接する名詞を一例として「例示」する意味、まさにそれだと「強調」する意味や、口調を和らげたり不確実なことを示したりするために上接する名詞や文全体をあいまいに示す意味で用いられる。

ガナの表す意味についてまとめる。不定語を上接するものは、具体例として挙げたものが不定であるため、漠然と範囲を不定のまま示す用法である。ガナそのものは「上接語を具体例として取り上げ、他の同類項の存在を想定させる」という「例示」の意を持つと考えられる。名詞やその他の語を上接する場合も、基本的には「例示」の意であり、ここから派生して口調を和らげたり不確実なことを示したりするために、上接する名詞や文全体をあいまいに示す意味で用いられるようになったと考えられる。「強調」の意については願望の終助詞モガナ・ガナの影響が考えられる。副助詞ガナの「上接語を一つの具体例として取り上げ、他の同類項の存在を想定させて上接語の示す範囲を拡大する」という「例示」の働きのうち「具体例として取り上げる」働くと、終助詞ガナの「まさにそれが欲しい」と希求する働きがあいまって、上接語を「強調」する意で解釈できる例が現れると考える。

用法の変遷についてまとめる。近世前期の古い台本ではほぼ不定語を上接するものに限られるが、狂言記正編で動詞連用形を上接する独自の用法が見られ、和泉家古本や正編を除く狂言記類で名詞を上接し推量表現と共起する用法が現れはじめる。近世中期、驚流の台本で用例数は少ないものの様々な形式で用いられたが、虎寛本では極めて定型的、固定的な形式で多用される。この期、特に「～でがなあらう」と推量の文末辞に割って入る形で各台本で多用される。三百番集本の時代まで下り、様々な助詞を上接するなど用法に広がりが見られるようになる。

ガナの用法の変遷と非常によく似た現象を、同じく「例示」や「強調」を表す副助詞バシの場合にも観察することができる。筆者は拙稿(2003)で、狂言台本中で助詞バシが疑問表現と共起する場合が多く、特に近世中期以降、諸流派の台本で、「～でばし+ござるか／おりやるか」という、疑問の文末辞に割って入る形で多用されることを明らかにしている。

元来まったく別の助詞であるガナとバシは、近世中期以降の狂言台本で、「例示」を中心とする共通した意味で用いられるようになり、文末辞に割って入り文全体を取り立てるという似通った用法で用いられながらも、ガナは推量文に用いられ、バシは疑問文に用いられるという使い分けがなされていたと考えられる。ガナについては、狂言台本だけではなく他の近世の文献でも推量の文末辞に割って入る用法が見られるため、狂言固有の表現ではなく、近世に一般的に口語として用いられていたと考えられるが、バシについては他の近世の文献には管見の限りそのような用例を確認していない。バシの狂言台本における疑問の文末辞に割って入る用法は、意味が類似し、近世期に口語として用いられていたガナの影響を受けて作られた用法であると考えられる。

今後の課題として、狂言台本中でのガナとバシとの意味機能の相違点・類似点を明らかにし、また、ガナが用いられない推量文との表現性の違いを考察する事により、これらの助詞群の狂言台本中での性質を明らかにし、位置づけを試みたい。その上で、室町時代口語資料としての抄物との比較によって、これらの助詞群の用法の変遷を明らかにしたい。

注1) 例えば岩波書店刊行『大蔵虎寛本能狂言上・中・下』の凡例では、底本に記されていた濁点に(マヽ)を附し、それ以外のものに、大蔵流山本東次郎の口伝を参照し濁点を付したとされるが、上巻・三人夫では「つれがなましい」、下巻・宗論では「つれかなましい」と、同じような場面に現れる例で清濁に違いが見られる。

注2) なお、現存最古の狂言台本である天正狂言本については、不定語を上接する副助詞ガナが語りの中に1例、願望を表す終助詞ガナが5例見られた。また、祝本、大蔵虎清本、鷲忠政本については収録曲数が少ないため、本論文では同列に表に示して扱うことを避けたが、祝本では不定語を上接するものが1例、虎清本では2例見られた。忠政本では用例は見られなかった。

注3) 虎明本の「身共にむいてそのつれな事をいはゞきくまひがな」(はくやう)の例は、総索引では副助詞とされているが、「後にくやまふがな」(うつぼざる)などの例と同様、ガナと判断し、用例から除外した。

注4) なお、他の副助詞に見られる、別の助詞を下接して全体で連用的な名詞句になる用例は見られなかった。

○資料

- ・北原保雄・小林賢次(1991)『狂言六義全注』勉誠社(天理本、222 曲)
- ・北原保雄・池田廣司(1972～1983)『大蔵虎明本狂言集の研究上・中・下』表現社(273 曲)

- ・芸能史研究会・池田廣司(1975)「和泉家古本『六議』」(『日本庶民文化資料集成』4 巻狂言) (180 曲)
- ・北原保雄・大倉浩(1983)『狂言記の研究』勉誠社(正編、50 曲)
- ・北原保雄・小林賢次(1985)『続狂言記の研究』勉誠社(50 曲)
- ・同(1997)『狂言記外五十番の研究』勉誠社(50 曲)
- ・北原保雄・吉見孝夫(1987)『狂言記拾遺の研究』勉誠社(50 曲)
- ・天理図書館善本叢書と書之部編集委員会(1984)『驚流狂言傳書』(享保保教本、150 曲)、
- ・北川忠彦・関屋俊彦(1989～1991)「翻刻驚流狂言『宝曆名女川本』一～六」(『女子大國文』105～111) (120 曲)
- ・笹野堅(1942～1945)『大蔵虎寛本能狂言上・中・下』岩波書店(165 曲)
- ・古川久(1953～1956)『日本古典全書 狂言集』朝日新聞社(寛通本、192 曲所収、100 曲のみ掲載)
- ・野々村戒三・安藤常次郎(1938)『狂言三百番集上・下』富山房(三百番集本、300 曲所収、うち調査対象としたのは和泉流の曲目にかぎった。)

調査には、総索引があるものは各総索引を利用した。挙例に際しては下線部の略称を用いた。

○主な参考文献

- 朝留和洋(2004)「狂言台本に見える副助詞「がな」について」日本語学会 2004 年度春季大会予稿集
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究——助詞史素描——』桜楓社
- 小林賢次(2000)『狂言台本を主資料とする中世語彙語法の研究』勉誠出版
- 小林正行(2003)「狂言台本における助詞バシの様相」国語学会 2003 年度秋季大会予稿集
- 佐藤宣男(1973)「助詞「がな」の変遷」『藤女子大学国文学雑誌』13
- 堀内武雄(1967)「特殊な助詞の研究—ばし・がに・づつ・がな」『国文学 解釈と教材の研究』12 号
- 森脇茂秀(2000)希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって(1)『別府大学国語国文学』42
- 森脇茂秀(2001)希望の助辞「もがな」「がな」をめぐって(2)『山口国文』24
- 山口堯二(1988)副助詞「など」とその周辺『語文』大阪大学
- 湯澤幸吉郎(1970)『徳川時代言語の研究』風間書房
- (1954)『江戸言葉の研究』明治書院
- (1955)『室町時代言語の研究』風間書房
- 吉川泰雄(1959)「『がな』の研究」『国文学 解釈と鑑賞』4 巻 9 号 学燈社

(こばやし まさゆき・東京都立大学大学院生)